

花水木

Hayashikoshi Eri
林越 栄莉 (74期)

「温故知新、故きを温ねて新しきを知る」—私はこの言葉を何度も目にし、時には自らこの言葉を発していたこともあります。弁護士生活2年目にして、ようやくこの言葉の意味を少しずつ理解し始めたような気がしています。

思い返せば、第74期として弁護士登録された2022年4月以降、私は新人弁護士として日々目の前のタスクをこなし、クライアントからのご要望に応えることに精一杯の日々だったように思います。

長い受験生期間を経てようやく飛び込むことができた実務の世界は、確かに刺激的でとても楽しく、毎日が学びの連続でした。特に、私が所属する弁護士法人GVA法律事務所はスタートアップ企業の法務支援を中心に行っている事務所であることから、最新の法務課題や初めて知る法律に取り組むことも多く、今日まで新鮮で充実した日々を送ることができています。

さりとて、新人弁護士の日々には「なぜ弁護士を志したのか」「弁護士として自らが掲げる理想や理念」といったいわゆる初心に立ち戻る機会を持つ精神的・物理的余裕はなかなかない、というのもまた現実としてありました。

ところが、最近、私に初心に立ち戻る機会を与えてくれる本に出合い

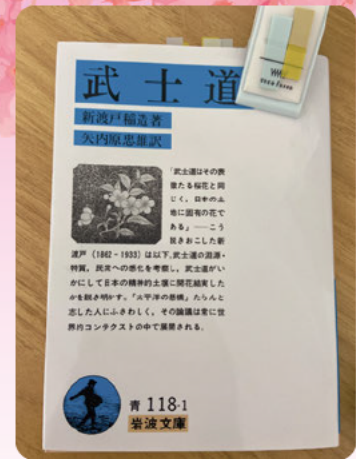
ました。それが新渡戸稲造著／矢内原忠雄訳『武士道』（岩波文庫）です。

元々、私が弁護士を志すきっかけとなった原点は、私が大学生の折、小さな町工場を営んでいた両親が事業経営において法律問題に直面し、弁護士の先生に窮地を救っていただいたことにあります。

私はこの出来事をきっかけに、ごく普通の幸せな人生を送る人々であっても、自分に非がないにもかかわらず理不尽に法律問題に直面し得ることを知り、人生の岐路において人々が直面した法務課題を、法律を以て正しく解決しようと奔走する弁護士の先生方の姿を見て非常に感銘を受け、法曹の道を志すようになりました。

『武士道』では、武士道の淵源・特質等について世界中の思想や文化と比較しながら考察が行われています。その中でも、武士の掟中最も厳格なる教訓とされる「義」の項目を読んだ際、ふとこの原点を思い出すに至ったのです。

本書において「義」が明確に定義づけられているわけではないと思われませんが（と私は理解しております）、「義」の定義について数名の歴史的に著名な人物の考えが引用されています。中でも、特に私が共感を持つのは、真木和泉による



クリップ付箋がとても便利で気に入っています。

以下の定義です。「節義は例えていわば人の体に骨あるがごとし。骨なければ首も正しく上にあることを得ず、手も動くを得ず、足も立つを得ず。されば人は才能ありとて、学問ありとて、節義なければ世に立つことを得ず。」（原文ママ）

年数を重ねるにつれ、弁護士としての知識や経験は増えていくことでしょう。しかしながら、「義」がなければ、ただの老獪な弁護士となる道が待っているだけだと思います。初めて法曹を志すことを決意したときの「なぜ弁護士を志したのか」「弁護士として自らが掲げる理想や理念」は、今後、私が弁護士として長く活動していく際に「義」を思い出させるものとして、常に羅針盤になる大切なものであることに『武士道』は改めて気付かせてくれたのでした。

この文章が掲載される頃には、私は弁護士生活3年目を迎えます。老獪にも、ベテランにも程遠い年数ではありますが、今回、故きを温ねたことにより初心に立ち戻り、また新しきを知ることができたことを忘れず、折に触れて古典に親しみ、最初に思い描いた弁護士像に少しでも近づけるようこれからも日々研鑽を詰んで参ります。

